やさしい囲碁史

第3回

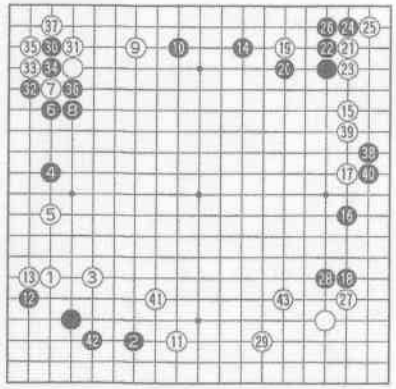
三国志の英雄が打った棋譜

古作　登（大阪商業大アミューズメント産業研究所主任研究員）

中国の歴史書の中で最も人気があるのは、全土統一を目指し多くの個性的な武将が活躍した『三国志』と、それを基に書かれた明代の小説『三国志演義』であろう。三国志の舞台は漢王朝の統一が崩れた2世紀末～3世紀末だが、中国における囲碁の歴史はそれよりずっと前の春秋戦国時代から続いており、囲碁を打ったと思われる偉人は少なくない。

世界最古の棋書とされる『忘憂清楽集』には三国時代の棋譜が掲載されている。下の棋譜は江南の大国、呉の基礎を築いたとされる孫策（175～200年）と側近の武将、呂範（？～228年）の対局とされるもの。43手までで打ち掛けとなっている（黒・孫策）。

古い時代の囲碁は現在のような初手から自由に着手できるルールでなく、複数の石を置いてから始める「事前置き石制」であることがわかっている。また、囲碁が単なる遊戯でなく易や天文、陰陽五行説と関連付けられるようになり、知識人のたしなみとして尊ばれるようになったのは漢代から。有力武将たちが碁をたしなんだのはごく自然のことといっていいだろう。



当時は白先で、身分や技量の高い方が黒を持つことが普通とされた

『忘憂清楽集』の成立は宋代の12世紀ごろ。発掘物を基にした研究では、3世紀ごろの囲碁は17路盤で打たれていたことがわかっており、図の19路盤対局は後世の創作と考えるのが自然だろう。

やさしい囲碁史

第4回

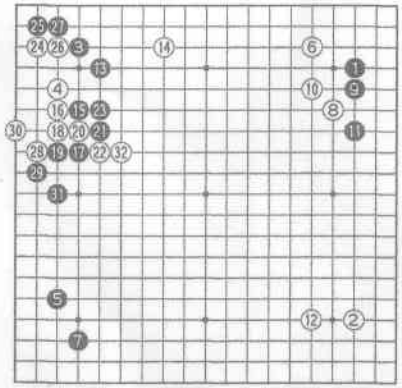
最初の新聞囲碁欄

古作　登（大阪商業大アミューズメント産業研究所主任研究員）

現在囲碁界の主たるスポンサーは新聞社で、各種メディアに棋譜を掲載することによりファンはプロの戦いを楽しむことができる。ファンはスポンサーの新聞を購読するか、関連の商品やサービスに対価を支払うことでビジネスモデルが成り立っている。こうした仕組みの原点ができたのは明治時代である。

江戸時代、本因坊算砂らに俸禄（ほうろく）が支給されて以降続いてきた家元制度は江戸幕府崩壊により消滅した。それでも囲碁の持つ魅力が高く、庶民にも人気があったため1878（明治11）年「郵便報知新聞」紙上に初めて囲碁欄が設けられることになった。

対局者は中川亀三郎六段（1837～1903）と高橋杵三郎五段（1836～1902）。中川は十二世本因坊丈和の三男で、十四世本因坊秀和門下。村瀬秀甫（のちの十八世本因坊秀甫）らと最初の囲碁結社「方円社」を設立し囲碁界復興に尽力、八段・準名人にまで昇った。対局相手の高橋は「方円社四天王」と呼ばれた強豪。



明治11年4月1日掲載の中川亀三郎－高橋杵三郎（先）戦（32手まで）

方円社は渋沢栄一、岩崎弥太郎ら財界人の支援を受け世界最初の囲碁雑誌『囲棋新報』も創刊、現在につながる棋界の基礎を築いた。

第1譜は81手目までほぼ手順のみ、その後3譜に分け感想、総評が付け加えられた。郵便報知新聞に続いて読者増を期待し、多くの新聞が囲碁欄を設けるようになった。